

## 『夢は枯野を駆け巡る』(1)

師走、12月。年齢を重ねると、その年数を分母とした数字が段々と大きくなり、分子の1年が相対的に小さくなって、1年を早く過ぎる感じるのだとか。まさに、もう年の瀬を迎える。一年の締めくくりの月だが、今年はそう簡単には締めくくれない。

現実に経験せずとも、また阪神淡路大震災

駅舎を壊された内陸部の世界遺産・平泉。北上川河口・橋の袂の小学校で命を落とした幼い子どもに宛てた母親の手紙を刻んだ碑。漁業と連携できない復旧・復興住宅。丘の上の病院の一階まで津波に襲われた女川町には建物の底を見せて今なお横たわるビル。原発立地によるものか、人口規模に不相応の体育施設群に仮設住宅が並ぶ。TVで伝えられた3階建てであるが、その生活の行く末は依然として不透明である。前衛芸術のようにビルの上にバスが残る石巻。亡くした家族との思い出を引きずりながら何度も足を運んでいるであろう花と線香が残る仙台市若林地区。塩に浸された田畑への綿花栽培のささやかな試み。なだらかな白砂青松の地は近郊の海水浴場と

の経験者でも更に人生観が変わるという未曾有の災害をもたらした東日本大震災。地震・津波・原発事故から、はや9か月が過ぎようとしているが癒されない傷、定まらないそれぞれの地での復旧・復興。

今月号と来年(来月)1月号は、その締めくくれない思いを紀行文として伝えたい。

して賑わい、のどかな"養生"を送ろうとする高齢者を迎え入れた老人ホームの格好の立地場所であつたらうに…。押し流された長い松並木、土台だけを残して失った建物と人生。左右が泥沼化し嵩上げされた仮設道路を被災物満載の隣県ナンバーのダンプがすれ違う。震災特需でもある。断絶し津波に押し流された線路・駅舎の跡が残る巨理町・山元町。同じ県内とはいえ100キロも離れた会津若松の地で町役場ごと避難所生活を送る原発直近の町、大熊の被災者達。校庭に設置された自動放射能測定器。避難所代わりに使われた温泉宿。風評被害で来なくなった観光客のようや<回復の兆し>の象徴である数台の観光バスの姿を口に出し繰り返して喜んでいた友人の姿が印象的である。我々が映像で見る物理的施設の損傷は勿論のことであるが、見えない心の傷は大きく、原発事故による将来への不安とストレスは、傷を一層深く拡げて、想像し難いものがあるという。

“旅を止んで、夢は枯野を駆け巡る”

## 第46回 アイボリー・フォーラム

出版記念講演会 「地域主権時代の新しい公共」

—— 希望を拓くNPOと自治・協働改革

講師：今瀬 政司氏 / NPO法人市民活動情報センター代表理事  
□ NPO法制定に大きな貢献をした講師が、講演タイトルと同名の著書の出版を記念しての講演。

日時：2011年12月13日(火) 午後6時30分から

場所：ホテル・アイボリー 茜の間

参加費用：1,000円 ※事前にお申込みください。

参加申し込み：豊中駅前まちづくり会社 TEL: 06-6858-6190

ホームページからお申し込みいただけます。



今月の川柳

作品募集

自由なテーマで作品をお寄せください。皆さまからお寄せいただいた作品の中から数点を選び、まちづくりニュースに掲載します。掲載作品にはアイボリー寄席(2012年2月21日開催)のチケットを※ペアーで差し上げます。※締め切りは毎月月末で、翌月中旬号で発表します。

■郵送・E-MAILまたはメールで当社まで。